





全 訳 剪 燈 新 話

昭和二十九年九月二十五日 印刷
昭和二十九年十月一日 発行

定価 三五〇円

訳者

村上 知行

発行者

栗本 和夫
東京都千代田区丸の内二ノ二

印刷者

曾根 盛事
東京都品川区大井寺下町一四三〇

発行所

中央公論社

東京都千代田区丸の内二ノ二
丸の内ビルディング五九二区
振替口座東京三四番

印刷・扶桑印刷

製版・安藤写真製版

製本・自誠堂

序

「剪燈新話」は東洋の古典の世界の空にかがやいている、あやしく、うつくしい一顆の星である。それにはまず宝玉のようなきらめきがある。美女の白い手足のようななまめかしきがある。金襴のように巧緻で、骨董のように渋く、さらにまた、うしみつ時のひそやかさ、水の淵のようなふかき、嚙んだ口のいきどおりなどがある。中国のお化けで、このごろこちらでもっとも人気のでているのは、蒲松齡のあの老大な説怪の書「聊齋志異」であろうが、「新話」はそれにくらべると、もとは全四十巻だったものが、現存するのはその十分の一、わずかに四巻、毎巻は五篇より成り、附録の一篇をあわせても二十一篇のはなししかない。しぜん、一見したところでは「聊齋」に比し、たいそう藐小にはみえるけれど、じつをいうと、この「新話」が「聊齋」には先駆であった。お手本であった。生みの親であった。のみならず蒲松齡が平和な時代に、山東の片田舎で、しずかな文人の生活をおくったのにくらべ、「新話」をかけた瞿佑は元末明初の劉蕪の世にうまれあわせ、おまけにおもいもよらぬ禍にあい、晩年まで、およそ十六、七年間も関外に流謫

のうきめをみたという、不幸な人だった関係でもあろうか、「新話」のはなしにはより鋭さがあり、暗さがあり、凄さがあり、怨みがある。さらにまた、わたくしたちはこの本が嘗てあちらで、当局の忌避に触れていた本だったことにも、いちおう注意していいであらう。すなわち、かの魯迅の「中国小説史略」には次のような記載がみられるのである。

「唐の人の小説の単行本は、明代には十に九つまで散亡してしまった。——明のはじめになると、錢唐の瞿佑、あざなを宗吉という、詩作で名のある人がでて、この人はまた『剪燈新話』と題する小説もつくったが、テーマも、おもむきも、ともに唐の人に模したものの。その文章はよわわしくて及ばなかったけれど、閨情を粉飾し、艶語をつづりいだしたがために、ことのほか時の人によるこばれ、模倣するものがどつと出で、禁止にあつて、やっとこの風潮はおとろえたものであった。」

わたくしどもはまた、この「新話」を中心として、わが日本近世の怪談小説や芝居や講談が開展していったことをも記憶しなければならぬだろうし、さらにまた「新話」を中心として、ひろく東洋の全般に脈脈としてつらなりあった、ものがたりの伝播、改作、再生のあとをたどってみても、教えられるところが甚だおおいことであらう。いま仮りに「新話」のなかで、さまでおもきをなすものとは思えない猿のはなしの「申陽洞記」を例として取りあげてみても、このはなしの藍本は唐代のはじめにでた、作者不明の「白猿伝」であることが明かだが、わたくしは、學者でも何でもない自由なわたくしの野人的な立場から、この「白猿伝」が実はまたインドに原話

をもつものではなからうかと考えている。有名な「西遊記」の孫悟空がインドの史詩ラーマヤーナのハヌーマンから換骨奪胎していることは、はやくから気づかれていたところだが、だいたい、中国や日本にある猿の怪のはなしは、もとはおおむねインドに出ているらしいのである。」「白猿伝」はわが林羅山の「怪談全書」に「欧陽紇」という題で訳載されたし、さらにまた都賀庭鐘の「繁野話」で「白菊の方、猿掛の岸に怪骨を射るはなし」という一篇のものがたりに仕立てなおされてしまった。一方「申陽洞記」も浅井了意の「伽婢子」のなかに翻案されて「隠里」となったのみか、竜沢馬琴の「八大伝」のなかで信乃と浜路のわかれのくだりや、対牛楼のかたきうちのくだりとともに、もっとも世評のたかかった庚申山の怪異のくだりが、じつはやっぱりこの「申陽洞記」から着想されたもののなのであった。もっとも馬琴は猿を猫にすりかえ、怪猫ということにして、より日本化することに断然成功しているけれど、それでも庚申山のなまゑに申陽洞のうつり香を残しているのである。これを要するにわたくしどもが文化財として持たされている、むかしのいろいろなはなしは、さながらにかの因陀羅網(the diamond net of Indra)のよう。因陀羅すなわち帝釈天の網は、その網の目につづられた宝珠が、それぞれ、その一珠のなかに、他のすべての珠のかけをうつしあって、重重無尽であるというが、まことにそのようにインドや、中国や、日本のはなしは、じつはたがいに相映じつつ、きらめきあっているものなのである。もっとも、わたくしは以上の各箇条について、いずれ巻末につけくわえたわたくしの「剪燈新話と江戸文学」のなかで一応詳しくお話しするつもりなので、ここではこの上申しあげ

ず、ただわたくしのこの翻訳が、じつはわたくしの片意地からこころみられた冒険だということのみ、少少お断りしておきたいと思う。

「新話」は今しがた申しあげたようなわけで、江戸文学の研究には、絶対に無視できないもの。したがって天文年間に脱稿されたい中村某の「奇異雜談集」に、このなかから三つのはなしがとられて以来、くだって田中貢太郎氏が大正年代にみずから創作訳とことわって出された訳業にいたるまで、およそ四百年のあいだ、どれほどおおくの翻案、翻訳がでているか知れないが、そのくせ、ついに一部の読みやすい完訳すらも出てはいない。むろんそれには巻末に、あとで申しあげる通りな、翻訳を困難ならしめる本篇に特有の理由があったのだが、わたくしはじつは、だからこそみずから志して、わざとその鉄壁のように頑固な困難に体あたりでぶつかってみたものであり、その結果が、いくらかでも成功しただろうか、それともやっぱり、わたくしの敗北に終わっているかは、切にお読みくださるかたがたのご批判を乞いたいところである。

昭和二十九年初夏、東京都大塚の護国寺のほとりにて、訳者しるす。

瞿佑 原作

村上知行 訳

全 剪 燈 新 話
訳 せんとうしんわ

美女と妖鬼の譚 ものがたり

中央公論社 梓

卷の一

海神わたづみの豊とよのあかり 〔水宮慶會録〕……………二

奇蹟の八角井戸 〔三山福地志〕……………三七

朽ちたる毛衣けだま 〔華亭逢故人記〕……………四一

鳳ホトリの金のかんざし 〔金鳳釵記〕……………四九

聯芳樓ももいろばなし 〔聯芳樓記〕……………六一

卷の二

東洋の Prometheus 〔令狐生冥夢録〕……………七五

山の彼方に人住めり 〔天台訪隱録〕……………八五

姿のかえり咲き 〔朦穆醉遊聚景園記〕……………一〇一

牡丹燈記 〔牡丹燈記〕……………一二七

閨かたにみめよき乙女あり 〔渭塘奇遇記〕……………一二九

卷の三

日と月と雲と電いんげん〔富貴発跡司志〕……………一四五

朱冠の白蛇〔永州野廟記〕……………一五五

妖窟の三美人〔申陽洞記〕……………一六三

愛卿あいけいものがたり〔愛卿伝〕……………一七三

翠翠の伝〔翠翠伝〕……………一八九

卷の四

竜巻きの竜をたたえて〔竜堂靈会録〕……………二〇七

化けものに嬲なやられて〔太虚司法伝〕……………二二三

望みはかなたにあり〔修文舎人伝〕……………二四三

天上の宝の錦〔鑑湖夜泛記〕……………二五一

緑衣の女〔緑衣人伝〕……………二六三

附 録

秋香亭の記〔秋香亭記〕…………… 二七三

跋

「剪燈新話」と江戸文学…………… 村上知行 二八三

装幀・挿絵 水 谷 清

剪
燈
新
話
卷
の
一



海神^{わだつみ}の豊^{とよ}のあかり

至正^(元の順帝の年号)かのえさるのとし、潮州の人、余善文^{よぜんぶん}がじぶんのすまいで白昼閑坐^{はくじつかんざ}していると、とつぜん二人の力士^{ちからびと}の、黄なるずきんをかずき、繡^{ぬい}のもようのうわぎをきたのが外^{ぐわい}のかたから入ってきて、うやうやしく前にすすみ、

「広利王^(南海の神をいう)さまから、おむかえにさがりましてございます。」

と伝えるのであった。善文がギョツとして、

「広利王さまはわだつみの神にましまし、わたくしは塵^{ちり}ひじの世のものです。幽^{おの}、顕^{けん}と路^{みち}をことにしていて、どうしてそのようなご沙汰がありましようか。」

と言ってみても、二人のほうでは、

「どうぞいらしていただきたいのでございます。けっしてご辞退には及びませぬ。」

と、とうとう相伴^{さむらい}なって、城^{まち}の南門を出ていけば、江^{かみ}のほとりに、紅^にいろのおおきな船が一艘泊^{とど}てているのであった。乗りうつると、二匹の黄竜^{こうりゅう}がそれを遣^やり、雨か風かのすばしこさ。あっと

いうまに、とある門下へきてしまった。

力士は二人とも、報せにさきにはいつていった。

やがて、中へと誘われて、入っていけば、広利王がわざわざ堦をおりてきて、

「ご高名は久しいあいだうけたまわっておりました。わざわざお越しをねがったにつきましては、どうかお気を悪くはなさいませぬように。」

と、ついには殿上に迎えとり、むかいあって坐したのである。善文が落ちつけないで、もじもじするのが目に入ると、

「あなたはうつし世のおかたです。寡人はわだつうみの魚鱗の宮のあるじでして、おたがいのあいだには、司どるもの、司どらるもののけじめもないことですから、けっしてご遠慮はないように。」

善文はそれでもなお、

「大王さまには尊いご身分にましますのです。やつがれのようない介の貧乏書生が、どうしてもそのような晴れがましいおもてなしにあずかれましようや。」

と、かしこまって辞退するばかり。広利王の左右には二人の臣下の、龍参軍に龍主簿というのがいて、このとき前にすすみ出で、

「この客人の申し条には、いかにも理がありますことゆえ、大王さまには、なにとぞ彼が請うがままにおまかせあり、みずから御威徳を損ぜさせられ、輕輕しくせられてはなりませんまい。」



広利王は結局まんなかに居すゐることにしたのであった。善文のためにはその右がわに、別に榻がもうけられた。広利王は善文が座になおるのを待って、

「弊居はいたって片よったところにございまして、蛟鱈ずれにとなりあい、魚蟹のたぐいと居をともにいたしながら、わが神威をあきらかに示し、わが帝命をひろく揚げることもできがてにしておりました。ついてはこのたび、あらたに一殿をきずき、『靈徳殿』となまえをつけ、工匠のわざはすでにおわり、庭づくりまですべて成就しましたものの、ただ未だに間にあわせ得ないでいますのがむねあげの祝詞です。ほのかに承るところ、足下には世にも稀れる才を負わせられ、時を濟うの略にもおくわしくていられるとか。因って、わざわざこちらへお招きしてみたのでございましたが、幸にして寡人がため、一筆おねがい申したいものです。」

かくてすぐさま近侍のものにおいつけになり、白玉の硯をとりよせ、文のある犀の角を管とした筆、ならびに鮫絹を一丈あまり、善文の目のまえに差しおかせられたのだった。善文はかしこまってその仰せに従った。筆をとりあげてさらさらと、澱みなく綴りなした、そのことばは次のよう――

伏しておもんみるに天壤のあいだ、海をもっとも大なりとし、人物のうちにしては、神をもっとも靈なりとす。香のたむけ、あかりのたむけ既にあり、なんぞ廟堂のおごそかなるを缺ぐべけんや。因ってここにかさねて殿づくりなし、あらたにそが華名をかかぐ。竜骨をかけたわしてうつばりとなせば、靈光は目にかがよい、魚鱗をあつめてかわらと敷けば、瑞気は空にわ